住民のニーズから生まれた奥真妻活々倶楽部

印南町上洞地域で国道の拡幅工事に伴って、地域に一軒しかない商店が、立ち退きを機に閉店することになりました。そこで、地域の人達が力を合わせ、何とか「自分たちの店を」ということで町役場の力も借りて奥真妻活々倶楽部を立ち上げました。その取り組みを代表の太田正美さんと副代表の太田敏彦さんに伺いました。

奥真妻活々倶楽部の施設と国道

西岡：今日は、ここの地域の取り組みについて、お話を聞かせていただきたいと思って、事務局の九鬼と柳田と西岡が、寄せていただきました。よろしくお願いします。

まず初めにこの地域の人口は、どれぐらいですか。

真妻地域の過去と現在

太田正美：ごく少ないんですよ。この前の町会議員、選挙のときに、この地域でも1人立候補したんですが、そのときに、昔の旧村単位で言うたら、真妻村なんですけど、有権者数が420～430人しかないんです。そのうち上洞地域が大体120～130人の間。川又はもうちょっと多い140人ぐらいやと思います。もう1つ、高串っていう地域に10軒ぐらいあったんですけども、ダムで水没して、全戸よそへ引っ越しました。

ほとんどが有権者で、子供がほとんどいない。

西岡：子供がほとんどいないんですか。

太田正美：高校3年生まで有権者になったんですが、2人か3人ぐらいしかいなかったですね。

九鬼：小学生は何人ほど。

太田正美：小学生はここで3、4人やな。川又は2人かなあ。中学生は4人や。

自分が小学生のときに、上洞小学校というのがあって、6年生まで160人近くはあった。中学校は真妻地域で1つだったけども、そのときは3年で5クラスあった。

柳田：学年に2クラスほどあったんやな。

太田正美：2組あった。それから急激に減っていった。

西岡：面積的に言うと、かなり広いですか。

太田正美：印南町の中でも面積は、山ばっかりやけど割りと広い。

柳田：杉やヒノキの植林が多いの。

太田正美：山の景気のいいときは金持ちばっかりやったらしいわ。山の仲買して、皆もうけて大きな家ばっかり建ってたけど、最近はその山が人気がない。

柳田：千両なんかやっていないの。

太田正美：千両は、20年ぐらい前が一番最盛期だった。今はもう、年取ってきてつくる人も少ないし、値段も安いわな。

柳田：そしたら、農業はしているの。

太田正美：年金暮らしの人

わかやま住民と自治
発行／和歌山県地域・自治体問題研究所
和歌山市太田2丁目14-9　太田ビル203号
TEL･FAX 073-488-3127
jichiken@crux.ocn.ne.jp　2017年10月号
2017年9月25日発行　第292号　（月300円）

目　次

住民のニーズから生まれた奥真妻活々倶楽部…… 1
橋本市の保育を充実させる会
保育を考える市民の集い①
保育と子育て環境の充実を目指して …… 4
熊野古道・鹿ヶ瀬越え
ささゆり復活・再生への挑戦
ささゆり愛好会（熊野古道語り部）　杉村　邦雄…… 7

太田正美氏と店内の様子

が主やな。中に兼業農家もあるんやけども少ない。

柳田：梅はつくってないの。

太田正美：兼業農家の人は、梅も一緒につくってるなあ。米とか千両とか梅。それで川又は、昔から有名なワサビ農家が。

柳田：ワサビあるんかい。

太田正美：専業でやっているのは、もう1軒か2軒や。あとグループで、実験的にやってるとこはあるけど、なかなかうまいこといかんみたい。ワサビ専業の人は、テレビ和歌山で放送されて注目されてる。その人は、結婚してみなべ町に住んでいるけど、実家は川又にある。

西岡：その人は、南部から毎日通っているんですか。

太田正美：そうそう毎日。その人は本格的にやるつもりやから、ワサビを和歌山市内の寿司屋やったかな、そういうところへ専門に卸してる。

九鬼：元々、何軒かあったんですか。

太田正美：明治時代ぐらいには、20軒ぐらいあったらしい。真妻ワサビが原産地なんで、それを静岡県へ苗を売って、今でも真妻ワサビというのはある。普通は1年以内でできるらしいけども、ちょっと時間かかるんで、商売になりにくいらしい。水が問題で、川又は自然の谷川を利用してやってたんやけども、最近はゲリラ豪雨で、岩ごし流されてしまうので難しいんです。静岡県では、富士山の伏流水とか。長野県では、山から自然に湧き出てくる水が豊富にあって、1年間温度が変わらず、養分があって成長が早いんです。

それからこの辺では、昔ながらの米づくりをしているのでおいしいらしいです。私らはわからんけど。

九鬼：何かブランド名付いてますか。

太田正美：付いてないんですわ。和歌山県の奨励品種を作っている。この辺は、天日干しするんで、おいしいんです。ここの店でも時々売ってるんです。付近の田辺でも置いてるけど、それでも地元の米はおいしいといってリピーターがあります。

地元で使う分ぐらいは売ろうが出発点

柳田：この店は、どうしてできたんですか。

太田正美：ここには以前、稲田商店という店があったんです。日用雑貨から魚、ガス、ガソリンなどすべてあったんです。それが国道の拡幅で立ち退きになったんですけども、ガソリンスタンドの立ち退きは、大きな施設をつくらないかんので、ものすごい金が要るらしいんです。その費用が、補助対象にならないので、店を全部やめたんです。ここはネット販売をやってて、割りと良かったらしいんやけども、ネットやからどこでもできるということで、全部やめたんです。

柳田：そしたら、ここにはガソリンスタンドがないんですか。

太田正美：なかったんです。それで、いろいろ工夫して、売るようにしたんです。

柳田：ガソリンから灯油も。

太田正美：ガソリン、灯油、軽油、地元で使う分ぐらいは売ろうということで。

柳田：ここで売りやる。

太田正美：消防署の許可取って。5ℓ、10ℓ、20ℓ単位でひと缶ごと売ってるんです。軽四のトラックで走る人はどこでも買えるけども、年寄りは、農機具だけ使うとか、草刈り機だけ、トラクターだけ、耕運機だけという人がわりと多いんですよ。印南にあるガソリンスタンドから、持ってきてもらうので値段がちょっと高くなるけど、それでも御坊よりは安い。

柳田：プロパンは、みんなどうしてるの。

太田正美：プロパンは、御坊にある伊藤忠が引き継いだんや。

九鬼：稲田商店が引き上げたあとの経過は？

奥真妻活々倶楽部の立ち上げと運営の苦労

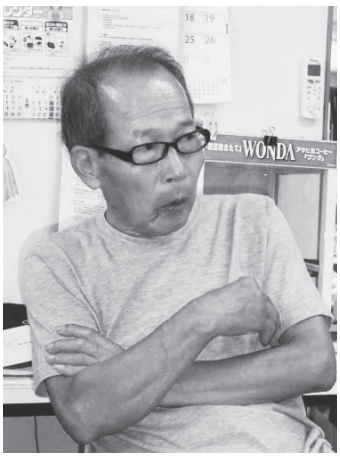
太田正美：稲田商店がやめるという話が出たときに、区長している私のところに、役場の方から「補助事業あるさかい店をもう一遍やってみるか」といってきたんです。地元の皆さんに聞いたら、やる気のある人があったんで、一緒にやろかという話になった。それが、3年半ぐらい前。平成26年の2月に開店したんです。その前年の9月町議会で、補助金もらう予算が通ったんです。

九鬼：補助金てどれぐらいですか。

太田正美：全部で1300万円。国から900万円、町から400万円。この建物の改装費用と資材も入れて。外にガソリンスタンドとガスボンベの倉庫あったんですが、全部取り壊して広場にしたんです。

九鬼：ここの建物とかは、補助金をもらって開店にこぎ着けたと思うけども、運営とか、出てくれる人の日当とかの経費はどうしたんですか。

太田正美：そこが大問題やってね。運営費なんか補助金が出やんから、これ作る時に、地域再生事業の中で、


太田敏彦氏

シャクナゲ植えたり、ハイキングコースをつくったりして、自分らが出て働く日当を全部集めて、それを運営資金に回したんです。

柳田：それを積立てみたいな格好で。

太田正美：それでも30、40万円ぐらいしか集まらなんだ。仕入れ金もないぐらいだったんや。備品でも補助対象になる分とならん分があるので、ならん分を買うた。あと運営資金がないんで、地元の老人クラブから50万円ぐらい借りて、運営資金に回したんや。

九鬼：奥真妻活々倶楽部何とか運営委員会とかつくったんですか。

太田正美：それもつくったんですわ。

九鬼：あとの運営費は？

太田正美：初めのうち女の人が店番するのは、まるっきりのボランティアでやってもらったんやけども、運営していく中で、ちょっとずつ利益出すようになってきて、日当１０００円から２０００円です。それも契約して、６か月単位ぐらいで見直しして、出せるようだったら出すというような感覚で働いてもうてます。

九鬼：１日１０００円。

太田正美：始まりはね。今は２０００円。働いてるメンバーは、あそこにある写真の13人。

柳田：13人ですか。

太田正美：ここをやるときに、日高川町寒川で、月に一遍ぐらいしか店開けてない「そうがわ茶屋」を見にいってきて、割りと簡単に考えてたんやけどね、やっぱり苦労が大分多いですね。

柳田：そうよな、難しいよな、商売は。ちっと利益上がってきているんかい。

太田正美：そうやね。出荷するのも、販売するのも、１００円売ったら、幾ら店へ落ちるという話合いして決めてます。

九鬼：区から何かでているんですか。

太田正美：区からは出てないです。まるっきり区はタッチしてない。

働いている13人のメンバー

九鬼：独立採算ということですか。

太田正美：そうですね。

太田敏彦：１年間の収支です。（収支表を渡される）

柳田：８６０万円ほど売ってるんやなあ。

太田敏彦：営業日は、３１日。町のかえるフェスティバルに行った分も入っています。

柳田：地元の人は、この店を守っていこうという意識を強く持ってくれている？

太田敏彦：どれくらい持ってくれいてるか疑問やけど、この奥の川又部落のおばさんらも、「ここの店あるさかい、ありがたい」って言うてくれる人結構います。

柳田：潰さんようにせんなんという気持ちを、地区の人に持ってもらえたらな。

太田敏彦：若くて車で飛び歩く人は、出ていって安いものを買ってくる。向こうへ買いに行くこと思ったら高い。

九鬼：ここへ来なければ買えないという、そんなのありますか。

新商品開発にもチャレンジ

太田正美：地元の蜂蜜が人気で、よそから買いに来る。値段高いけども、本物やっていうことでね。ただ季節が限定されるんでなあ。

九鬼：養蜂をやってる家が何軒かありますか。

太田敏彦：趣味でやってる人が、持ってきてくれる。

太田正美：ニホンミツバチだから、ちょっと値段が張るんです。

太田敏彦：この人らは、奥真妻百花って言ってます。

九鬼：そうですか。その他に何かありますか。

太田敏彦：県の和みのむら活性化支援モデル事業で、ワサビが入った金山寺味噌とか、柿の葉寿司みたいなワサビの葉でくるんだ鯖寿司を始めよかっていうことで、この間、文化センターへ行ってプレゼンしてきたんです。

九鬼：それは、まだ実現していないんですか。

太田敏彦：補助金はいただけることになってるんです。

柳田：できるようにはなってるの。

太田敏彦：ええ。商品開発する女性７人の「こでまりグループ」があるんです。

九鬼：こでまり。

太田敏彦：「こでまり」は花の細かい可憐な花ですわ。今店番してくれてる人や、（一覧表を見せて）こういうメンバーです。

九鬼：こでまりグループが、商品開発するんですね。

太田敏彦：（商品の実物を持って来て）これが普通のお味噌なんですよ。これにワサビを入れた金山寺味噌をつくったらどうかということです。

西岡：これから、色々と地域の資源を活用して特色のある商品開発を進めて、地域が活性化していくことに期待しています。本日は、お忙しいところありがとうございました。

橋本市の保育を充実させる会

保育を考える市民の集い①

保育と子育て環境の充実を目指して

橋本市では、10年前に幼保一元化5カ年計画が出され、昨年まで凍結と言っていた計画を、市当局が今年になって一転「民間丸投げの計画」を発表しました。説明会では決定事項を伝えるだけで、意見を聞く姿勢がないという不満が多数出されました。橋本市の保育を充実させる会は、8月19日に橋本市民会館で「保育を考える市民の集い」を開催しました。集いでは、大阪自治体問題研究所研究員の木村雅英氏が講演し、橋本市の保育現場から保育士の水口彰子さんとしみず保育園保護者代表が報告、八尾市の幼保一元化を考える会の山下美苗さんが報告しました。今回は紙面の関係で、水口さんと保護者からの報告を掲載します。

急がず時間をかけて対話し、安全で安心できる質の高い保育園を

しみず保育園　保護者代表

皆様こんにちは。しみず保育園で6歳になる息子がお世話になっています。よろしくお願いします。本日は、『保育を考える市民の集い』で保護者代表として発言させて頂ける事をありがたく思います。

こども園整備計画について

今年5月13日、学文路地区（しみず保育園・清水幼稚園・学文路幼稚園）と、山田地区（山田保育園・柏原保育園・岸上保育園）の保護者会長に（仮称）「山田・学文路こども園整備計画」についての説明会が開かれました。おおまかな内容は、次のとおりです。

山田地区は、柏原保育園を解体し跡地にこども園建設。解体開始平成32年4月（1年前倒しになったと聞いている）。開園年度平成33年4月（1年前倒しの可能性）。学文路地区は、旧学文路中学校を解体し跡地に建設。来年1月解体開始。開園年度は平成31年4月公私連携幼保連携型認定こども園として、山田地区と同一法人で運営。法人の募集要項の配布は昨日まで。法人を選定して12月には、協定書を締結し、議会で予算提案。

同5月28日、会長から保護者に「こども園整備計画」についての報告がありましたが、突然のことで保護者は戸惑いと不安で、納得も理解も全くできませんでした。

その後、市の担当者から保護者説明会が行われました。ぼく自身、直接聞けばある程度理解できるものだと期待してすべて参加しましたが、期待は裏切られました。開園までの期間が短く対話する間がない。会長からの報告（5月28日）後たった7ヶ月で法人の決定。とにかく急ぎすぎです。

個人的な見解

平成29年6月27日文教厚生委員会の中で副市長が「理解して頂いた中で整備していく」と説明。8月号市議会だよりでも、「整備を進めるうえで保護者と園児が一番大切にされるべきである。7月から始まる保護者説明会で、担当職員が丁寧に説明され保護者の理解が得られる事を期待して賛成する」と記載されています。しかし、現時点では、納得のいく説明はないし、理解もしていないのに進んでいます。

同一法人についても、（仮称）学文路こども園は5年後には45人以下の可能性があり、法人が運営出来ないから（仮称）山田保育園とセットでという、法人の経営の心配は間違ってますよね。園をつくっていくのは、子ども達であり保護者同士・地域の関わりがあり保育に直接関わる保育士

私たち公立園で働く者の思い

しみず保育園保育士　水口彰子

がいて成り立つものであって、「目先の法人より現在の保護者の意見を聞き対話する事」が大事だと思います。

保育士不足についても、引き継ぎ保育期間に間に合うのか？集まっても、経験不足・スキル不足が懸念されます。離職率も5年未満で約50％、10年未満で80％というデータがあり、保育士の採用も明確な説明がないので不安です。

素晴らしい保育園

しみず保育園には、自然豊かでアットホームな雰囲気や保育士の人柄、保育の質にほれ込み、大切な子どもを安心して預けられている家庭がたくさんあります。

ある保護者さんは、3歳児で発達に少し遅れがあり、通っていた公立保育園がこども園に変わり保育の質に疑問を抱いて、しみず保育園に移って来たとおっしゃっていました。

現在は、毎日楽しく笑顔でいてくれて、日々の成長が目に見えてわかるし、とても感謝しています。

しみず保育園の保育士さんは、園児一人ひとり丁寧に保育して頂いていて、調理師さんも食べることの大切さ（食育）を出来る限り地元の食材を使い、園児と一緒に作る事でコミュニケーションもとれています。園長をはじめ主任が信頼されているからこそ、保育士みんなで助け合える保育環境で、スキルの向上や時代の変化に対応した保育の質の向上を図ることで、保護者と保育士そして保護者同士のコミュニケーションもとれていて、本当に素晴らしい保育園です。

しっかりと対話し理解・納得を

最後に、急いで進めても絶対に安全で安心できる質の高い保育園はできません。

引き継ぎ保育期間が半年では短すぎます。園行事だけでも1年間あり、口頭ではなく実際に見て体感し対話を重ねることで感じることができます。引き継ぎ保育期間を延長すれば、法人が開園前に地域とのコミュニケーション（地域コミュニティ会議に参加）をとり、地域との信頼関係が構築できます。引き継ぎ保育期間を2年延長すれば、現在の2歳3歳児は卒園でき、現在抱えている不安は解消できます。こども園に必要な地域コミュニティや保育士の研修・質の向上ができます。現在の保育士はそのまま雇用すれば、安心できます。

しっかりと対話し時間をかけ、理解・納得した中で整備していくことを願います。

幼保一元化　5ヵ年計画と理由

橋本市では、10年前に公立保育園・幼稚園を統廃合して、建物は市が建て、中身は民間に経営してもらうという公設民営のこども園、幼保一元化5カ年計画を発表しました。

5年で10ヶ所の保育園と8ヶ所の幼稚園を統廃合して、5つのこども園を作るという無謀すぎる計画でした（現在、公設民営のこども園4園と保育園1園が開園済）。市当局は、私たち職員はもちろん保護者、市民に説明するのではなく、もう決まった事として、トップダウンの報告でした。「なんで公立でできないのか？」と聞いた時「新設園は民間委託と条例で決まっている」という、何とも腑に落ちない回答でした。

実際は計画通りには進まず、耐震問題と急傾斜危険個所に指定された保育園3園と幼稚園1園の計画が凍結されました。そして10年たった今、凍結状態だった「学文路こども園」と「山田こども園」の計画が急に進みだしました。理由は、財政難と少子化、建物の老朽化、官から民へ、民に任せられるところは民にしてもらったらいいという考え方です。

保育行政の在り方に強い怒り

果たしてそうでしょうか？保育・子育ては行政が責任を持たず民間に任す。橋本市の保育行政の在り方に強い疑問と怒りを覚えました。今まで自分たちが頑張ってきたことがどう評価されていたのか！誰にでも出来る事やないかと思われていた事と、一番手をつけてはいけないところを真っ先に切り離した事は許されることではありません。「なぜ公立でできないのか」という事を訴え続けてきたのですが、明確な答えもなく、財政難、園舎の老朽化

がもっぱらの理由です。納得いくはずないんです。私たちには、公的保障・公立従事者、市民の為にというバックボーンがあります。公的責任があるのです。それを市は手放そうとしていることに、憤りを感じずにはいられません。

私たちがなぜ公立にこだわるのか！

市当局は、民間に任せてそれぞれ特色のある保育をしてもらったらといいと言います。人格形成期の乳幼児、この大事な時期に必要な「特色のある保育」っていったい何なんでしょうか。

私たちは公的保育を守り、どの子にも平等で一人ひとりにあった丁寧に関わる保育を心にとめながら、日々子ども達、親御さんと接しています。その時その時によって保育に求められるニーズは変わってきます。それに対応し、この子の為、この親御さんの為にできる事は何なのかをまず考えます。調理現場も同じです。アレルギー食はもとより、その子の体調によっても、その日のメニューを変える柔軟できめ細かい対応をしています。

「丁寧に関わる」と一言でよく言われますが、どういうことか、一人ひとりをよく見てその子を知り、その子をとりまく環境にも目を向け大事にするという事。どの子も大切に、ぼくはぼくでいいんだ。私は私でいいんだという思いを持てるように関わる。自分の事をいつも見てくれている。分かってくれる大人がいるということほど安心安定して過ごせる場はありません。それが公立です。

満員の参加状況

橋本市の保育は３ヵ月や半年で引き継げない

私たちは公立職場で長く勤めさせていただいて、長年研鑽を重ねて得てきた経験とスキルがあります。市は民営化していく園に、橋本市の保育を引き継げと言います。一緒に仕事をして、目標とする人を真似て、いいところを自分のものにしてこそ保育の継承はできます。３ヵ月や半年で私たちが培ってきたものを引き継げると思ってもらっては困ります。

財政難と老朽化を今まで放っておいたのは誰か？子どもや親御さんや市民ではないはず。なのに、一番大事で一番弱い立場の所から手をつけてなくそうとしていく。市としての子育て事業や保育施策が本当に見えてきません。お金がかかるから手を放すとしか思えない。

橋本市の財産を育てている

この間、園訪問で元中学校教員だった先生がしみず保育園の保育を見て、小規模で自然な異年齢のかかわりをしている事に感心していただきました。

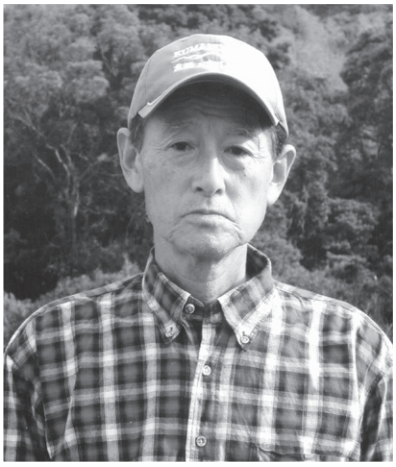
年中児は年長児と関わる事で、「あんな年長さんになりたい」とあこがれを持ち、成長していきます。それは次々と引き継がれていくものです。思春期になって、「あんなリーダーになりたい」と思う基礎作りをしているともおっしゃってくださいました。ひいては社会に出た時にリーダー性を発揮できる子が育つと。これは橋本市にとっても財産を育てていると感じてほしいです。うれしい思いを共感してくれた。楽しい思いを共有できた。悲しくて辛い時寄り添ってくれた。そういう経験を積み重ねた子どもたちは、社会に出た時、悔しい思いをしても、理不尽な思いをしても、乳幼児期のこういった経験や感情や感触が心の中に根付いていて、きっとその子を支えてくれる。そして乗り越えて次へ向かっていく。そう信じて私たち公立で働く職員は、日々子どもたちと関わっています。公立が行っている保育が、今は目に見えなくても将来きっと芽がでるのです。

何度も言います。今、手を放してはいけないのは何なのか。将来のある子どもたちに今必要なのは何なのか。公立で働く私たちは、第一にその事を思い、保育に携わっています。

公的職場ゆえに、他機関との連携もすぐにとれ、対応も素早くできるよう、直接、市に訴えに行く事も出来ます。公的保障とはそういうものだと思います。

熊野古道・鹿ヶ瀬越え
ささゆり復活・再生への挑戦

ささゆり愛好会（熊野古道語り部）　杉村邦雄


杉村邦雄さん

広川町から日高町原谷を通る熊野古道は、石畳が残りいにしえが色濃く残る区間です。また、日高町の特産品である黒竹林の続く風情と藤原定家が「崖嵬の嶮岨」と泣き言をいって登ったといわれる険しい鹿ヶ瀬峠があります。

熊野古道の語り部をされている杉村邦雄さん（日高町在住）が、熊野古道でささゆりを復活する活動をされているという話を耳にして、報告していただきました。

地球が悲鳴をあげている

今年の気候異変は日本列島の各地でもういをふるった。テレビ、新聞などのメディアは異常気象とその関連する災害を連日報じた。日本のどこかで災害が起こっていた。諸外国でもアメリカの大型ハリケーン、中国やなんぽうの国々で洪水などの氾濫も。地球が傷つき、悲鳴をあげている。

後鳥羽上皇や藤原定家も歩いた鹿ヶ瀬峠

小生は二十数年来、世界で二つ（もう一つはスペイン～フランスに通ずるサンチャゴの道）しかない「道の世界遺産」〈祈りと参詣の道、熊野古道〉の語り部を続けてきた。「道」は豊かで、すてきな自然あふれる顔で訪れる人々を迎えいれ、「蘇りの道」とも呼ばれている。多様な樹木、古道沿いに咲く、多くの山野草も古道歩きの人を癒してきた。熊野古道鹿ヶ瀬越えの「ささゆり」もその代表的ともいえる一つである。決して派手さはないものの、やさしく、なんともいえないたおやかな淡いピンクの花、そしてささゆりの由来である百合の仲間のなかでも涼しげな葉。そして、馥郁とした香りが漂う。草むらでひっそりと鹿ヶ瀬の黒竹の合間で咲くささゆりが峠を越え、疲れきった人々の心身にやすらぎと癒しを運んできた。

ささゆり

後鳥羽上皇と御幸をともにした歌人の藤原定家が『崖嵬の嶮岨』と泣き言をくりかえしながらよじ登った鹿ヶ瀬峠（大峠）。

増基法師は『鹿の鳴く声を聞いた・・・』とも。

蟻の熊野詣とも称された古道で人々は「ささゆり」を見たのであろうか。

絶滅状態のささゆり復活へ

そのささゆりがいつの頃からか、減少を続け、まもなく絶滅状態に至った。原因は人による無神経な乱獲もあったとはいえ、主として、猪や鹿などの鳥獣害による食害がもたらしたものであることが判明した。古道のあちこちで植物や昆虫などが環境の変化に対応することができずに姿を消していった。野草たちのいくつかは幻の花として、記憶を留める種となっていった。

紀伊半島＝熊野で発見。「クマノギク」と命名され、比較的日高の地でもよく見かけたが、昨今はほとんど見られなくなった。レッドデータブックで絶滅危惧種にあげられている。

熊野菊（クマノギク）はキク科ハマグルマ属の多年草で、別名を浜車（ハマグルマ）ともいう。本州の伊豆半島から沖縄にかけて分布し、海岸近くのやや湿った場所に生える。海外では、台湾、中国、マレーシア、インドなどにも分布する。

復活再生を願う方から苗をわけてもらい、自宅の庭で増やすように努力を継続中。古道の限界の生態系の変化は急速に進行している。古道沿いの山々、里山などは以前とは違う大きな変化

ささゆり復活事業参加者の活動風景 --

が進行している。山に人々の手が入らなくなり、山中の水の道が多くの場所で大きく変わっている。いつどこででも大規模災害が起こりうることがわかってきた。ここ十数年の山の荒廃ぶりは深刻ではなかろうか。猿、猪、鹿、アライグマ、熊など鳥獣害の被害＝獣害は深刻さを増している。災害の多発と獣害も密接な関係があるだろう。

古道のあちこちで、猪が掘り返し、道を傷め続けている。鹿も苗木などかたっぱしから食べつくしている個所も多い。

日高町語り部の会の呼びかけで、熊野古道・鹿ヶ瀬（原谷地区）越え「ささゆり復活・再生への挑戦」が始められた。

行政や子どもたちも応援

一昨年来、和歌山県や日高町の大きな援助も頂き、日高中学校・内原小学校・志賀小学校・比井小学校や小中地区のふれあい子ども会など多くの子どもたちや先生たちが、球根の栽培に取り組んでくれました。

呼びかけに応えて頂いたボランティアの方々は、辛苦を厭わず献身的に協力してくれました。

ささゆり募金に寄せられた多数の想い。多くの人々のささゆり復活への願い。たくさんの想いや願に後押しされた挑戦は、最も予想された猪対策には知恵と工夫が実り、成功を収めました。これで谷あいの随所に、ささゆりが花開くことだろう。子どもたちにも「咲いたら見に来てよ。」と夢を語った。

「茫然自失」全身から血の気が消えていった

ある日、地方新聞の記者から一本の電話が・・・・球根を植栽した場所に芽を出し始めた写真を撮影に来たが、「様子が違う」とのこと。数日前に現場を見回りしたが異常はなかった・・・。あわてて、駆けつけると鹿の大群が新芽をほとんどすべての個所で食い荒らしていた。数時間は峠の谷あいで座り込んで動くこともできず、まさに「茫然自失」全身から血の気も何もかも消えていった。

石畳道

新聞の報道を見て、多くの方からはげましやなぐさめが。「猪に勝ったけど、鹿に負けたんやなあ。また出直しやなあ。応援してるから・・・」「高い金費やして、鹿に餌やったんかいな」「人より獣が賢いし、知恵もある。また、諦めんと挑戦したら・・根競べやで。」

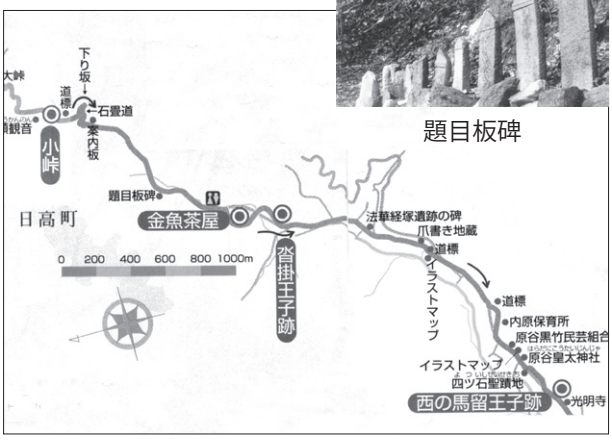
挑戦は続く

和歌山県の農政課の担当者によれば、鹿ヶ瀬＝原谷の鹿の生息数は県下でもワースト2とか。原谷でのささゆりの復活再生は、ある意味〈無謀な挑戦〉だとのこと。しかし、「獣害は人間が力を合わせれば、ふせぐことができるのだ」との名言もある。暴れ者の猪の暴虐は食い止めた知恵と力。鹿もみんなの力が知恵を寄せ合えば・・・。

子どもの頃、学校の行き帰りに見たささゆりをもう一度。

無邪気に古道の道に座り込んで球根を大切に植えて、ささゆりがふるさとに咲く日を夢見てくれ、期待している子どもらのあつい思い。そして多くのボランティア、ささゆり募金の賛同者。そして多くの熊野古道の語り部たち、古道を訪れる人々。挑戦が「無謀か？」「可能か？」答えはまだ先にある。挑戦は続く。

題目板碑



熊野古道地図